

10月21日開催 米沢郷米生産者交流会

# コメは語る。見えますか？コメの向こう側。

## 自然循環型農業と産地の取り組み

米沢郷の田んぼからできたワラは牛舎や畑に敷いて使い、もみ殻は平飼いの鶏の下敷きに。それらは再び堆肥として田畑へ還していく…というように地域の資源（エネルギー）をうまく循環させています。一般的には品種が同じであればAさんとBさんのコメは一緒にされてしまいます。米沢郷米は、栽培方法別、品種別、生産者別に管理されているので、米袋一つひとつに生産者の名前が入っているのです。こんなコメ、なかなかないですよ。

## 栽培方法の違い（できるだけ農薬を使わない）

いい種を選ぶこと、まずはそこから。そして風通しよく間隔をあけて種を撒き、丈夫に育った苗はすき間を十分にとって植えます。健康に作れば健康な実りがある、と言います。慣行栽培（一般的な作り方）では、予防的に病気や害虫に対する農薬を使うようです。写真を見ると、1株の稲に13匹もトンボがとまっているのに、隣の慣行栽培の稲は全く生き物がいないのです。見た目は同じ『コメ』。でも、育つ過程の中で生き物はいなくなってコメだけ残る—そのコメを食べて大丈夫なのでしょうか？米沢郷米の生産者がどうやって作ったか、ぜひ知ってください。



## 若手生産者が育っています

就農6年目の井上さん(30歳)が「高温、無雨、長雨など気候が極端になっているが、田んぼは水管理を、ブドウ(米の他にデラウェアを栽培)はハウスの温度管理を可能な限りきめ細やかに対応している。経験は浅いが、美味しい農作物を届けられるように頑張っていきたい。」と、抱負を語ってくれました。米沢郷に若い農家が多いのは複合的に経営を組み立てているから。「それと、相場に左右されず組合員に買ってもらっているから安定生産できる。おおよその収入が見込める。」生産者の伊藤さんは、力を込めて話されました。

私たちの『登録』の意義はここなんです！

Q.隣の田んぼの農薬は入ってきませんか？

A.田んぼの間の畔に除草剤をまかないことや、農薬を使う場合は飛散しない粒状のものを使うようお願いしています。人間関係が大切です。隣の田んぼにいない生き物がいるということが一つの証明になっていると思います。

### ◆こんなに違う米沢郷米と一般的な栽培方法◆

	種子消毒	田植え時の坪あたりの株数	肥料	除草剤	殺虫剤
米沢郷米	温湯処理	50株	100%有機肥料	1回(3成分以内)のみ	不使用
一般的な栽培	農薬液につける場合もある	70株	化学肥料	山形県では20成分回数	

## 日本の農業の未来は・・・

今年は豊作でしたが、コロナ禍の影響もあって米が余り、市場価格は下がっています。でも稲を収穫するコンバインなどを動かすためのガソリン価格は上がり、そんな中で農業を続けていくのは大変です。気候変動で山形でも高温になってきていて、作物を作る環境が激変しています。米沢郷はコメのほかにも果樹を作っている人が多く、今年は経験したことのない霜の被害でサクランボは1~2割しか収穫できない農家が多発したとのこと。「気候変動に技術だけで対応していくのはもう無理だという状況にまで来ている。」との言葉に、私たちも一緒に考えていかなくてはいけないと強く感じました。

日本政府が打ち出しているみどりの食料システム戦略についても話されました。30年後に耕地面積のうち25%を有機農業にする。夢のような話だと思いましたが、そのために遺伝子組み換え作物やドローンを使った大規模農業を進めてい

というのでは手放しで喜べません。目先の利益や、うまい言葉に惑わされず、本当の意味での安全な農業、持続可能な農業は何なのか？を自分のこととして考えていきたい。そして一緒に考える仲間を増やしていきたいと思いました。皆さん、ぜひ登録して生協のお米を食べ続け田んぼを守っていきましょう。



### 『みどりの食料システム戦略』ってなに？

日本の農業は、生産者の減少・高齢化、気候変動による影響が深刻化しています。一方、高い評価を得ている日本の食文化の輸出拡大に期待が寄せられています。このようなことから、食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立を技術革新で実現するとして農林水産省が策定(令和3年5月)した政策方針です。